

あとかき

1998年、宮城県で子どもがかける電話「チャイルドライン」の設立準備が始まり、2001年に団体が設立された。2011年は設立10周年にあたるため、記念行事を企画し、会場も予約していた。ところが、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、予約していた会場も震災の影響で使用不能となってしまった。

その後は災害支援の活動に明け暮れたため、とうとう10周年記念行事の機会を逸してしまった。その後理事会で検討した結果、記念行事は断念し、震災後の活動を本にまとめてはどうかということになった。

震災後、各方面から被災地の子どもの様子を知りたいと、執筆を求められて書き溜めた原稿が大分あったので、それらを掲載すればいいという思いで編集を始めたが、読み返してみると、もう少し伝えたいことがあるという気持ちが生じ、結局新たに書き進めることになった。

しかし、当時書いた文章には、今は忘れてしまっている感情が込められている部分もあり、できるだけその思いは削らずに入れるようにした。読んでくださる方には、違和感を与える部分もあるかもしれないが、これらは嵐のような被災の渦中の、私たちの偽らざる感情であったことをご理解いただきたい。

この震災は、生死についての考え方や私たちの生活様式についても、大きな問いかけを残した。社会の変化、便利な生活を追い求める中で失ったものの大きさも考えさせられた。その最たるものは福島第一原発事故である。私たち

が次に世代に残すものが負の財産であってはならないと強く思う。

また、子どもたちも生死について深く考える機会を持った。大切な人を失った喪失感、生き残った罪悪感など、大勢の子どもたちが様々な思いを抱えて生きている。

これまで、チャイルドラインの電話を受ける中で、子どもたちへの親の過大な期待がどれほど子どもたちを苦しめているか、また親が子どもに無関心であることがどれだけ子どもたちにダメージを与えるかを見聞きしてきた。電話をかけてくる子どもの中には、「自分なんか生きていても仕方がない」と思っている子どもも多い。子どもたちがあまりにもあっけなく自らの命を絶つことが多い今日の日本で、どうしたらひとりひとりがかけがえのない命を持っていることを子どもたちに伝えられるだろうかと考えてきた。その答えの糸口が、凶らずも、今回の震災という不幸な出来事の中で示された。

ある子どもは、「これまで、何をやってもうまくいなくて、自分なんか生きていても仕方がない人間だと思っていたが、祖父と一緒に車で逃げるとき津波にあって、祖父が自分を車の上に押し上げてくれて、自分は助かり、祖父は流された。祖父にもらった命なので、祖父の分までちゃんと生きなければ。」と話していた。父親は、震災後の息子の変化に驚いたという。

天災は人智の及ばないところであるが、行動次第で命を守れることを示したのも今回の震災であった。私は、保護者対象の講演会などで、「あなたの子どもは無人島で生き抜けますか？」と度々問いかけてきた。聞いている方は「そんなことはうちの子に起こりえない」と思っていただろう

が、今回の震災で、「自ら考えて行動する力」「生き抜くための知恵と体力」が確かに必要だった。「生きているだけで十分」「そのままのあなたでいい」と子どもたちに伝え、子どもたちが学び、考え、心も体も育つ環境を保障していくことが大切であることを痛感したことも伝えたいことの一つである。

震災から3年がたつ。本当に長い3年だった。なぜ私たちがこんな災害にあうのか、という理不尽な思いはまだ消えない。どこまで続くのか、何年かかるのかもわからない回復への道を前にして、これからの苦難を考えると、不安や迷いでいっぱいになる。しかし、私たちは立ち止まらずに子どもたちと共に進んでいこうと思う。子どもたちはすぐに成長して私たちのパートナーとなる心強い存在であり、再生を託す「未来」そのものなのだ。

小林 純子

子どもとともに

～東日本大震災被災地子ども支援 NPO 三年の歩みと未来への提言～

発行日 平成 26 年 3 月 11 日

発行者 特定非営利活動法人 チャイルドラインみやぎ

〒 981-0954 宮城県仙台市青葉区川平 1-16-5

スカイハイツ 102

TEL/FAX 022-279-7210

印刷 笹氣出版印刷株式会社



環境に優しい植物油インキを
使用しています。